

テーマ：作品「舞姫」が私たちに伝えていること

1. (ア)テーマ設定の理由

小説には、必ず作者の伝えたいことがあるはずだと思う。「舞姫」を読んで、鷗外のもっとも伝えなかったことを、作品のタイトル、登場人物の感情や行動などから読みとり、考えを深めていきたいと思った。

(イ)どんな風にこれから論を進めていくか

豊太郎は悲劇のヒロインであり、つらく苦しい世の中で生きてきた主人公はかわいそうであるという結論をまず述べ、その根拠を二つ本文に基づきながら書くことで、その結論をさらに深める。

(ウ)このレポートで言いたいこと

鷗外が作品「舞姫」で私たちに教えていることとは、豊太郎は悲劇のヒロインであり、このつらい世の中で苦しむ主人公はかわいそうであるということである。

2. 本論

私は、この作品で鷗外は、豊太郎は悲劇のヒロインであり、このつらい世の中で苦しむ主人公はかわいそうであることを伝えたいと思っているのだと思う。

理由を二つの根拠を挙げて説明する。

まず一つ目の根拠は、この作品のタイトル『舞姫』である。タイトルは本文の一番伝えたいことが書かれている部分であり、この『舞姫』という言葉は、非常に大きな意味を表していると思う。私が推測するに、この『舞姫』とは、豊太郎のことである。

『舞』とは、『舞う』、つまり『周囲に踊らされている』ということを目指す。

本文に、『余は父の遺言を守り、母の教へに従ひ、人の神童なりなど褒むるがうれしさに怠らず学びしときより、官長のよき働き手を得たりと励ますが喜ばしさにたゆみなく勤めしときまで、ただ受動的、機械的の人物になりて……』とあるように、豊太郎は人の敷いたレールの上をただ進んで生きてきた。

ドイツ滞在時も、豊太郎は一時は自由になった気でいたが、結局は、天方伯の手中に彼の身(行く末)を置くこととなった。つまり、彼は他人の下に従え、教えに従い『動かされていた』つまり『舞おどらされていた』のである。

また、『姫』とは、自分をかわいいと表現しているのである。つまり、自分が大好きであ

ると表現している語なのである。

本文の中でも、『官長の覚え殊なりしかば』、『知識は、おのづから総括的になりて、同郷の留学生などの大方は、夢にも知らぬ境地にいたりぬ。彼らの仲間には独逸新聞の社説をだによくはえ読まぬがあるに。』、『仏蘭西語を最も円滑に使ふ者は我なるが故に、賓主の間に周旋して事を弁ずる者もまた多くは余なりき。』など、自分のことを自慢する＝かわいがる部分が読み取れる。よって『姫』も、豊太郎の特徴を表しているのである。

つまり、このタイトルは、『周囲の人の下で従い受動的な人間となり、揺れ動かされてしまっている、哀れで、またかわいらしい我』ということを表していることになり、このことから、タイトルからも、悲劇のヒロインであることを強調しているのである。

二つ目の根拠は、本文の『彼が生路はおほむね平滑なりしに、憾可数奇なるは我が身の上なりければなり。』という文章である。この文の現代語訳は、『彼(相沢)の人生がおおむね順調であったのに、不運で波瀾に満ちているのは私の境遇であったからである。』という意味である。

相沢は、天方伯の秘書官であることから、人の下で従い働くことは常であるという確固たる意志がみられ、また、相沢は快活な人柄であった。それに対し、豊太郎は、人の下で従い働くことで受動的な人間になることに疑問を覚え、また自由な環境に身を置くことで、自分の弱さを知った。また、エリスとの交際が原因となり、ドイツでの学費をうち切られ、散々であった。

このように、全く違う考え方や性格をもつ相沢と豊太郎とを比較することで、より自分の哀れさ、不幸さを強調させていると読み取れる。

3. まとめ

このように、「舞姫」では、鷗外は、豊太郎は悲劇にヒロインであるとし、このつらく苦しい世の中で生きてきた主人公はかわいそうなのであるということ、タイトルや登場人物、心情などで強調させて伝えようとしているのである。

だが、このような意図で鷗外が「舞姫」を記したときに、鷗外は読者からの、豊太郎への同情を求めているのであろうか…そこを考えると、未だに疑問に残る部分ではある。